

POCUS のはじめ方

— 診療所での消化管エコー活用術

執筆：豊田英樹（ハッピー胃腸クリニック院長）



本コンテンツはハイブリッド版です。PDF だけでなくスマホ等でも読みやすい HTML 版も併せてご利用いただけます。
▶HTML 版のご利用に当たっては、PDF データダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。
▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から 3 営業日以内にお送り致します。
▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することで HTML 版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は <https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/> をご参照ください。

▶登録手続

Introduction p1

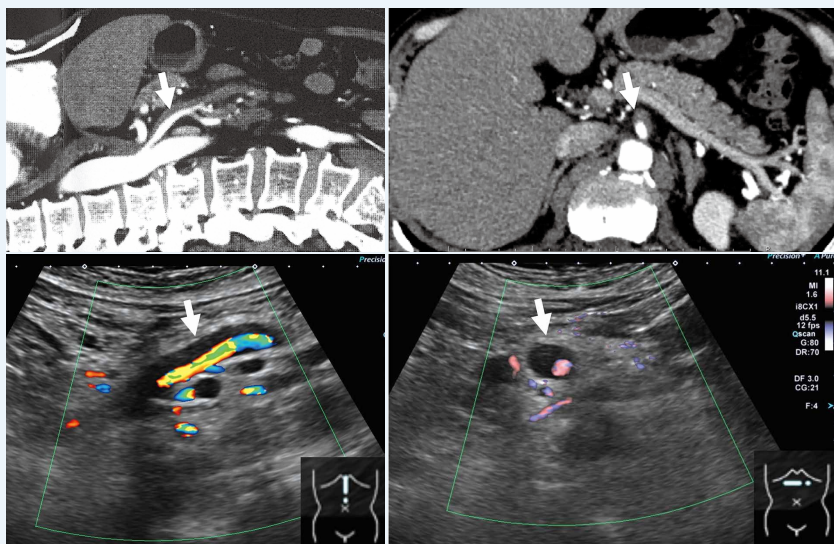
1. 診療所の差別化戦略としての腹部 POCUS と

消化管エコー p4

2. 腹腔内はすべてエコーで観察する p6

3. 様々な腹部症状に消化管エコーを活用する p12

4. 腹部エコー上達のコツ p32



▶HTML 版を読む

日本医事新報社では、Web オリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

Introduction

1. 診療所の差別化戦略としての腹部POCUSと消化管エコー

- ・ 消化管エコーを始めたのは
- ・ 臨床医がベッドサイドで診療の一環として行う超音波検査をpoint-of-care ultrasound (POCUS) と呼ぶ
- ・ 目標とする腹部POCUSのレベルは？ 他院の腹部単純CTの診断レベル以上を目標にする
- ・ 診療所での腹部POCUSで最も重要なことは進行癌を見逃さないこと

2. 腹腔内はすべてエコーで観察する

- ・ 解剖学はエコーを行う際の地図である
- ・ 肝臓・胆嚢・胆管・膵・腎・脾・心・大血管・胸水の有無・膀胱・子宮・前立腺はルーチン化してさらっと見る
- ・ 腹部症状の大部分は消化管に起因している
- ・ 消化管エコーの走査法
- ・ 消化管壁の肥厚，消化管の拡張に注目する
- ・ 消化管周囲の脂肪組織にも着目する

3. 様々な腹部症状に消化管エコーを活用する

(1) ディスペプシア (心窩部痛・心窩部不快感など)

- ① 胃潰瘍
- ② 急性胃粘膜病変 (AGML) と胃アニサキス症の鑑別
- ③ 進行胃癌

- ④十二指腸潰瘍
- ⑤機能性ディスペプシア

(2) 便秘

- ①便秘をエコーで確認する
- ②大腸癌による狭窄を探し出す
- ③腸閉塞を否定する
- ④エコーによる必要な下剤の推測
- ⑤直腸に注目する

(3) 下痢

- ①下痢をエコーで確認する
- ②小腸をみる
- ③細菌性腸炎を診断する
- ④一過性型虚血性大腸炎
- ⑤直腸から連続性に口側に広がる大腸炎
- ⑥専門病院に紹介するべき腸炎とは
- ⑦下痢でも大腸癌に注意！

(4) 腹痛

- ①急性虫垂炎
- ②大腸憩室炎
- ③小腸アニサキス症
- ④移動性盲腸
- ⑤便・ガス貯留による腹痛（大腸癌も含む）
- ⑥血管性の病変

4. 腹部エコー上達のコツ

- ①自分の診療に直結する領域のエコーから始める
- ②徐々に領域を広げ、sonographic generalist を目標とする
- ③解剖学アトラスを手元におき参照する
- ④身近なメンターを見つけ判断に迷った症例について教を仰ぐ
- ⑤「消化管エコーセミナー」に毎年参加する
- ⑥畠二郎先生の連載「エコーは推理だ！ 読影のポイントと描出のコツ」
(メディカル朝日：2020年4月現在休刊)のバックナンバーを読む

1. 診療所の差別化戦略としての腹部POCUSと消化管エコー

(1) 消化管エコーを始めたのは

筆者の専門は消化器内視鏡である。12年前に内科・胃腸科で開業したが、腹部症状の多くが内視鏡では診断できない現実に直面した。「お腹の中はブラックボックスだから正確なことは私にもわかりません、でも緊急手術が必要な状態ではないようです」が私の口癖であった。CTを導入することも検討したが、経済的にも読影の面でも困難を伴うため断念した。「低コストで患者の苦痛なく、腹部の状態、特に消化管を観察する方法はないだろうか……」と悩み続けた。そんなとき、川崎医科大学教授・畠 二郎先生の連載を偶然に読み、消化管エコーについて知った。

このコンテンツでは、畠先生の講演や著書などから学んだことを基本に、消化管エコーをクリニックでの診療に導入した経験をもとに解説する。

(2) ベッドサイドで行う超音波検査—— point-of-care ultrasound (POCUS)

症状や患者からの情報をもとに、考えられる疾患を確率で絞り込んでいくことが基本である。しかし、待合室が混んでくると強いプレッシャーがかかるため、ゆっくり患者の話を聞く余裕はなくなる。さらに言葉の通じない外国人や記憶のあいまいな高齢者・子どもなどでは、詳細な問診は困難である。

診察室ですぐに行うエコーが point-of-care ultrasound (POCUS) であり、その活用により一気に診断のステップを短縮できる。当院では診察室のベッドの横に超音波診断装置を置き、腹部の触診に引き続いてエコー検査を施行している。POCUSと「検査室でエコーの専門家が行う検査（検査